

# アイヌ語を母語とする世代と暮した 日本語を母語とする人のアイヌ語の語彙理解 (1) \*

岸本 宜久

## Understanding of Ainu Language Vocabulary Among Japanese Speakers Who Have Lived with Native Ainu Speakers (1)

Yoshihisa KISHIMOTO

**要旨**：家庭内でアイヌ語を母語とする家族と同居して育った 1947 年生まれの女性へのアイヌ語の語彙理解に関する質的調査を実施した。言語背景として日本語が母語・第一言語でアイヌ語を獲得・習得した自覚を持たない人であっても、アイヌ語を母語とする家族や周囲の人々とのコミュニケーションの中で自然と習得されるアイヌ語がある。アイヌ語を母語とする世代（日本語とのバイリンガル含む）とアイヌ語を母語として獲得せずに日本語にシフトした世代との間でのどのようなアイヌ語の使用・習得があったのか。本稿では、語彙レベルでのアイヌ語の記憶に着目した調査結果から、対人評価、行為要求、文化的経験、民族コミュニティ、家財、動物、間投詞にかかわる語彙を中心とした聞き覚えが得られたことを示し、考察を行う。

**キーワード**：アイヌ語 鶴川方言 継承語 語彙理解 戦後世代

### 1. はじめに

#### 1.1. アイヌ語の継承と研究

記述言語学におけるアイヌ語の言語研究・調査は主に、幕末から明治時代、大正時代、昭和初期に生まれ育ち、アイヌ語を母語として獲得した話者（多くはアイヌ語と日本語のバイリンガル）を対象に行われてきた。たとえば、アイヌ語の語彙調査としては最大規模の成果となる服部（1964）は、文献から語彙を引用した千島方言を除く 9 つの方言について実際に調査しており、1950 年代当時に各地の話者から採録された語彙の貴重な資料である。一方で、服部（1964：7-8）は同調査における 14 地域 17 名の調査協力者について「アイヌ語が流暢に話せるのは半数に足りない。しかも、いずれも高齢の方々だ。（中略）恐らく、北海道全道を探しても、良い話し手は 20 人とは得られないのではないかと述べており、アイヌ語の調

査・研究の緊急性を説いている。もちろん、このようなアイヌ語・アイヌ文化の世代間継承における深刻な状況は、近代以降の急激な和人の増加、同化政策がもたらした結果である。

20世紀後半は語彙や文法などの言語調査をはじめ、音声・映像によるアイヌ語の記録、テキスト資料や辞書の公刊など、アイヌ語の記述研究における多岐にわたるフィールドワークの最盛期を迎えたといえる。また、それまで潜在的な話者であった人々のアイヌ語が再活性化したり、話者を取り巻く状況が変化したりして、顕在的な話者となってアイヌ語の継承や研究に大きく貢献した事例も報告されている（中川・大谷 1995）。しかし、21世紀に至る現在では、「高齢層になるほど、短い文で会話できる、単語を知っているという確率はあがるが、アイヌ語を第1言語として、あるいは幼少期から親しんで流暢に操れる話者は、少なくとも研究者が把握している限りではほとんどが他界してしまった」（北原 2011：92）という現状もあり、アイヌ語話者へのフィールドワークによる調査研究も20世紀後半に比べると減少傾向にある（20世紀後半の調査で得られた資料の整理と分析は現在も続けられている）。

アイヌ民族の家庭で日本語を母語・第一言語として育ち、自身でもアイヌ語を獲得・習得した自覚がないという言語背景を持つ人々は日本語にシフトした世代とみなされ、従来、アイヌ語の記述研究における調査対象として注目されにくい存在であった。しかし、そのような言語背景を持つ人々の中には、生まれ育つ中でアイヌ語を母語とする家族と生活をともにした経験のある人々もいる。家族間では主に日本語しか使わなかった家庭であっても、アイヌ語を母語とする人が家族や周囲にいる環境においては、言葉の中に自然とアイヌ語が含まれている可能性は高く、アイヌ語を母語とする日本語話者のコードスイッチングや言語の混合的な発話に触れることも十分にあると考えられる。

本稿では、1940～1950（昭和20～30）年代に現在の北海道勇払郡むかわ町汐見で生まれ育ち、アイヌ語を母語・第一言語とする家族と日本語で生活をしてきた女性の協力を得て、アイヌ語の語彙理解に関する質的調査を行った結果を示す。その上で、日本語を母語・第一言語とする戦後世代におけるアイヌ語鶴川方言の習得について考察する。

## 1.2. アイヌ語鶴川方言について

本稿では、鶴川最下流域の左岸に位置するチン（勇払郡むかわ町汐見）のアイヌ語をアイヌ語鶴川方言と呼ぶ。鶴川方言については、昭和から平成にかけてまとまった記録が残されている。1988年度には北海道教育委員会による民俗調査が行われ、鶴川流域での生活や文化に関する民族誌的データとともに、アイヌ語の語彙や短文、歌が記録されている（北海道教育庁社会教育部文化課 1989）。また、1996年から2002年にかけては映像作家の片山龍峯氏が、前述の調査でも中心的に協力した汐見出身のアイヌ語話者のもとへ通い、アイヌ語の語彙や短文、語りなどの膨大な録音資料を残している<sup>1</sup>。また、2010年代以降もアイヌ語を母語と

<sup>1</sup> 片山龍峯氏によるアイヌ語鶴川方言の採録データは、2014年から千葉大学人文公共学府地域研究センターのホームページ上にあるアーカイブ内で「アイヌ語鶴川方言 日本語-アイヌ語辞典」として公開されており、2025年2月現在、語彙と用例を中心に全テキストの検索と音声の聴取が可能な状態にある

する話者への言語調査が続けられ、アイヌ語鶴川方言のテキスト資料などが公開されている（岸本 2023）。

他地域と同様、近代以降の急激な和人の増加、同化政策は、鶴川流域のアイヌ語、アイヌ文化の世代間継承に深刻な影響を与えてきた。アイヌ語の話者数を正確に把握することはできないが、少なくともアイヌ語と日本語の二言語併用の言語環境で育ち、家庭内などで自然にアイヌ語を身につけた人は高齢世代でも数少ない現状である。また、そのような相対的に若年層のアイヌ語話者と捉えられる世代よりも後の世代のアイヌ語の継承実態については、管見の限りまとまった研究がないようである。

アイヌ語と日本語のバイリンガル世代がアイヌ民族コミュニティの中老年層に健在であった時代の汐見において、アイヌ語を母語とする世代（日本語とのバイリンガル含む）とアイヌ語を母語とせずに日本語にシフトした世代との間でどのようなアイヌ語の使用・習得があったかを次節の調査を通じて見ていく。



図 1. チン（汐見）の位置

## 2. 語彙調査

### 2.1. 調査概要

2023年10月29日、2023年12月24日、2024年2月10日、2024年5月16日の計4回、札幌市内の調査協力者宅においてアイヌ語の語彙理解に関する調査を実施した。調査協力者はむかわ町汐見出身でアイヌ民族としてのアイデンティティを有するT氏である。T氏の略歴は2.2節で述べる。

調査者（筆者）は仮名表記のアイヌ語が書かれたスライド（1調査項目につき1枚）をタブレット端末を用いて調査協力者に示し、その語についての理解（聞き覚えの有無、いつ、だれから聞いたかなど）や意味、使用例などを確認した。2.2節で述べる通りT氏自身は日本語を母語とし、アイヌ語を獲得・習得したという自覚はない。そのため、日本語の調査項目からアイヌ語を引き出すことは難しいと判断し、アイヌ語の調査項目を提示してのエリシテーション調査を行った。調査内容は調査協力者の同意を得て、ICレコーダーとデジタルビデオカメラによる録音・撮影を行った。

### 2.2. 調査協力者について

調査協力者はむかわ町汐見の出身で、現在は札幌市在住のT氏（女性）である。以下、T氏の言語的背景にかかわる経歴を示す。

---

(<https://www.gshpa.chiba-u.jp/cas/Ainu-archives/index.html>)。

T氏は1947年に勇払郡鷓川村（後の鷓川町、現在のむかわ町）汐見で生まれた。父方の祖母、両親、兄2人、妹2人の8人家族の長女として、農業（水田）を生業とする家庭で17歳まで生活した。就職を機に実家を離れ、結婚後は札幌市で生活している。

父方の祖母にあたる尾崎シュチミナ氏（1880 - 1962）<sup>2</sup>はチン（現在のむかわ町汐見）のご出身で、アイヌ語を母語としながら日本語も流暢に話すことができるバイリンガルであった。祖母のシュチミナ氏はアイヌ語を母語とする友人・知人とはアイヌ語だけで会話する一方、家庭内では家族に対して日本語で話していたという。T氏の父は両親ともアイヌ民族の家系の家庭で生まれ育ち、T氏の母は父方が岩手県にルーツを持つ和人の家系、母方が穂別豊田のアイヌ民族の家系という家庭で生まれ育った。父母ともに日本語を母語としているが、アイヌ語も十分に理解できたと考えられる。しかし、T氏の父母は家庭の内外を問わず一切アイヌ語を使用せず日本語だけで生活し、伝統的なアイヌ文化への積極的な参加や実践もT氏の記憶の限りではなかったという。T氏が接するアイヌ語はもっぱら祖母のシュチミナ氏のアイヌ語であるが、シュチミナ氏もT氏に話しかけるときは基本的に日本語であり、T氏もまた祖母が友人・知人とアイヌ語で会話する場に（気づいていても）参加していたわけではないという。そのため、T氏自身はアイヌ語を体系的に獲得・習得できる環境にはなかったという。ただし、T氏の周りには祖母をはじめアイヌ語を母語とする人々がおり、T氏に向けられる日常の言葉の中にも語句レベルでは自然とアイヌ語が含まれていたと考えられる。

なお、T氏は実家を離れたのち札幌市で働きながら北海道ウタリ協会札幌支部（現在の札幌アイヌ協会）の活動にも参加するようになり、伝統的な刺繍や舞踊などを学び実践してきた。このような活動を通じて覚えたアイヌ語もあるが、アイヌ語そのものの学習経験はない。また、T氏の配偶者は日本語の母語話者であり、現在に至るまで家庭生活においてアイヌ語に触れる機会はない。

### 2.3. 調査項目

本調査では名詞と間投詞を中心にアイヌ語の語彙への理解を確認する調査を行った<sup>3</sup>。調査項目の作成には、アイヌ語の基礎語彙の中でも特に重要なものが端的にまとめられている早稲田大学語学教育研究所（1983）を用いた。語彙調査に先立ってT氏からうかがっていた汐見での生活体験にかかわりが深そうな「人体」「衣」「食」「住」「道具」「生活」「人間・人間関係」「天文・地文」「動物」に分類される語彙を中心に調査項目を選定した。また、基礎語彙ではないが「ササム」（シシャモ）や「ヤットウイ」（長く大きなゴザ）など、筆者が汐見

<sup>2</sup> 尾崎シュチミナ氏は汐見のアイヌ文化を伝えた人物としても知られる。その氏名は『エカシとフチ』編集委員会（1983）で尾崎<sup>シウ</sup>シュチミナ（戸籍名シュチミナ）、汐見二区自治会（1987）で尾崎シウチミナと表記されているが、本稿ではT氏の発音を尊重して、尾崎シュチミナ氏と記す。

<sup>3</sup> 本来は基礎語彙調査票に基づく品詞を限定しない網羅的な調査が望ましい。しかし、2.1節で述べたとおり、本調査はアイヌ語を示して語彙への理解を確認するエリシテーション調査であり、人称変化が義務的な動詞の語形を文脈なしで提示して聞き覚えを問うのは難しいと判断した。そのため、原則として動詞を調査項目から除外した。ただし、動詞の中でも一部の形容詞的、間投詞的な述語表現は調査項目に残した。調査項目の拡充は今後の課題としたい。

で行ってきたアイヌ語調査において得られた語彙からも選定・追加した<sup>4</sup>。さらに、2.2 節で述べたとおり、T 氏に向けられる日本語の中にも自然とアイヌ語が含まれていた可能性が高いため、アイヌ語話者の日本語に現れやすいアイヌ語についてまとめている小野・奥田（1999：160）からも語彙を選定・追加した。

調査日ごとの調査項目数は、2023 年 10 月 29 日に 120 項目、2023 年 12 月 24 日に 33 項目、2024 年 2 月 10 日に 21 項目、2024 年 5 月 16 日に 20 項目であり、複数の調査日で重複する項目を除く異なり項目数は 179 項目である。

## 2.4. 調査結果

調査結果を表 1 に示す。服部（1964）を参考に調査項目の語彙に暫定的な分類見出しを付した上で分類別に配列した<sup>5</sup>。表内の「調査語彙」は調査時に T 氏に提示した表記・語形である。ひとつの調査項目として関連する語形を同時に複数示したものはスラッシュで併記した（たとえば、概念形と所属形など）。提示した語彙に対する「理解」は、T 氏が汐見での生活の中で聞き覚え、理解していると考えられる言葉を「○」、聞き覚えはあるけど意味は理解していない言葉、ないしは、意味はなんとなく思い浮かぶけどはっきりとした聞き覚えはない言葉、また、汐見での生活ではなく後年になって学び覚えた言葉を「△」、聞き覚えがなく意味もわからない言葉を「×」と分類した。「調査」の [1] ～ [4] はそれぞれ、2023 年 10 月 29 日の調査を [1]、2023 年 12 月 24 日の調査を [2]、2024 年 2 月 10 日の調査を [3]、2024 年 5 月 16 日の調査を [4] と置き換えたものである。「T 氏のコメント」は各調査項目に対する T 氏の回答を筆者が要約したものである。「わからない」「知らない」といった回答のみの場合は、表内へのコメント要約を割愛した。なお、2024 年 11 月 29 日、翌 30 日に T 氏に本稿の内容確認を行った。そのさいに得られた情報を「T 氏のコメント」の中で聞き取り日を付して補足として加筆した。

表 1 語彙調査の結果

分類	調査語彙	日本語訳	理解	調査	T 氏のコメント
人体 1	サパ／サパハ	頭	○	[1]	「サパ」も「サパハ」も頭のこと。どちらも聞いたことある。
人体 2	オトブ／オトピ	髪	×	[1]	
人体 3	ナン／ナヌフ	顔	×	[1]	

<sup>4</sup> 早稲田大学語学教育研究所（1983）は、田村すず子氏の調査によるアイヌ語沙流方言の基礎語彙集であり、28 分類およそ 1,800 語が収録されている。沙流方言と鶴川方言は特徴的に近い関係にあることが指摘されているが（田村 2002）、調査協力者に提示する語形は沙流方言の語彙をそのまま示すのではなく、筆者が行ってきた鶴川方言のフィールドワークで得ている語彙および千葉大学が公開する前述の「アイヌ語鶴川方言 日本語－アイヌ語辞典」の語彙を参考に選定した。

<sup>5</sup> 本稿の表 1 で示す調査項目の分類見出しは服部（1964）の分類見出しを参考にしており、おおむね服部（1964）の分類にあわせて配列している。ただし、服部（1964）の調査語彙にない項目や服部（1964）の分類では細かくなりすぎてしまう項目については、表の便宜を優先してそれぞれ近い分類見出しにまとめる改編を筆者の判断で行った。

人体 4	シク／シキヒ	目	×	[1]	
人体 5	ヌペ	涙	×	[1]	
人体 6	エトウ／エトウ フ	鼻	×	[1]	
人体 7	キサラ／キサラ ハ	耳	△	[1]	耳かなと思ったけど自信はない。
人体 8	パラ／パロホ	口	△	[1]	口か頬かのどちらかだと思う。「あれは本当にパロホ（ポロホと言ったかもしれない）だな」といえば、おしゃべり好きだという意味で周りの大人が言っているのを聞いた覚えがある。
人体 9	パルンペ	舌	×	[1]	
人体 10	ミマク／ミマキ	歯	×	[1]	
人体 11	ハウ／ハウエヘ	声	×	[1]	
人体 12	オムケ	風邪、咳を する	×	[1]	
人体 13	テク／テケヘ	手	○	[1]	手のこと。これは聞いていた。
人体 14	アシケペツ	指	×	[1]	
人体 15	トット	乳房	×	[1]	
人体 16	サンペ	心臓	×	[1]	
人体 17	ホン／ホニヒ	腹	×	[1]	
人体 18	カンカン	腸	×	[1]	
人体 19	フイベ	肝臓	×	[1]	
人体 20	オソロ／オソロ ホ	尻	△	[1]	尻だろうか。聞いたことはある気がする。
人体 21	オソマ	大便	×	[4]	
人体 22	オクイマ	小便	×	[4]	
人体 23	ケマ／ケマハ	足	○	[1]	「ケマハ」は足のこと。祖母が「ケマハがどうのこうの」と言っていたのを覚えている。
人間 1	オッカヨ	男	×	[1]	
人間 2	メノコ	女	○	[1]	女性のこと。
人間 3	ヘカチ	少年	○	[1]	男の子のこと。祖母が言っているのを何度も聞いている。

人間 4	マッカチ	少女	○	[1]	子どものこと。祖母が「マッカチ」と言っていたのを何度も聞いている <sup>6</sup> 。
人間 5	エカシ	おじいさん	○	[1]	おじいちゃんのこと。
				[3]	おじいちゃん。祖父。自分の祖父に限らず年取った男の人。聞いた言葉だけど、うちにはエカシ（祖父）はいなかった。周りの大人たちの日本語での会話で「あのエカシは」というように聞くことはあった。
人間 6	フチ	おばあさん	○	[1]	おばあちゃんのこと。
				[3]	おばあちゃん。年取った女の人とのことをいうと思う。周りの大人たちの会話で「あそこのフチはね」のように聞いた記憶がある。ただし、和人のおばあさんのことを「フチ」とは呼ばなかった。民族の中でのことだと思う。私は祖母のことを「フチ」とは呼ばず「ばば」と呼んでいた。周りの人たちも祖母のことを「ばば」と呼んでいて祖母が「フチ」と呼ばれていた記憶はない。
人間 7	オンネフチ	年寄りのおばあさん	△	[3]	聞いた言葉ではないけど、年いった年寄りのことだと思う。「オンネ」というのは古いというか、人生を重ねているような意味だと思う。
人間関係 1	ウタラ／ウタリ	仲間、親戚、同胞	○	[3]	「ウタリ」は親戚のこと。アイヌの仲間だけで年いった人たちが話す中で聞き覚えがある。和人の人たちには、こうは言わなかったと思う。
人間関係 2	イヤボ	お父さん	×	[1]	
人間関係 3	ハボ	お母さん	×	[3]	女の年寄りのことだろうか。自分の母のことを「ハボ」と呼ぶことはなかったし、母からも聞いたことはない。アイヌ語だということかんじはするが聞きなじみはない。
人間関係 4	アチャボ	おじさん	○	[1]	年上の男性だよ。聞き覚えある。

<sup>6</sup> T氏の「子ども」という語義のコメントについて、2025年2月7日にT氏に再度確認したところ「マッカチ」が少女だけのことかどうかはわからないが、祖母のシュチミナ氏はよく「あのマッカチが、・・・」のように子ども（わらし）のことを指して呼んでいたため「子ども」のことだと理解して覚えているとのことであった。意味素性の一部ではあるが、本稿ではT氏が汐見での生活の中で聞き覚え、理解していると考えられる言葉のひとつとして理解の項目を「○」としている。なお、この補足は査読者のコメントを受けての追記である。指摘に感謝する。

				[3]	聞き覚えはある。周りで「アチャポ」と呼ばれている人の記憶はないのでびんとはこないが、「アチャポ」が年上の人であることはわかる。
人間関係 5	ウナラペ	おばさん	△	[1]	聞いたことはあるけど、わからない。聞き覚えはある。
人間関係 6	ニシパ	立派な男性、長者	○	[1]	お金持ちの男の人のこと。昔から聞き覚えている。
				[3]	「ニシパ」はお金持ちのこと。この言葉には次のような記憶がある。小学 3、4 年生のころ、穂別栄にある友人の親戚宅に泊まりに行った。そこに口を染めたおばあさんが 2、3 人集まっていて、私を見て「どこのわらしだ、これ」「ニシパの娘だ」「尾崎のニシパの、どうのこうの」とこっちを向いて話していた。そのときは「ニシパ」という言葉を聞いてもびんとなかったけど、そう言われたことは記憶にある。日常でよく聞く言葉ではない。(2024 年 11 月 30 日に再度聞き取りしたところ、穂別栄で「ニシパ」と聞いたときには意味がわからなかったが、その後、汐見で暮す中で自然と「立派な男性」を意味する言葉だとわかるようになったとのこと)。
社会 1	コタン	村、集落	○	[1]	部落(集落)のこと。汐見のことをアイヌ語で「チンコタン」というのは、子どものころから聞いている。
				[3]	「コタン」は部落(集落)のこと。鶴川でいえば市街ではなく汐見などのアイヌ民族が住んでいる地域のこと。大人たちや周りの部落の人たちは汐見のことを「チンコタン」と思っていたようだ。
社会 2	シサム	和人	○	[3]	「シサム」は和人のことで、小さいときから聞いている。アイヌ民族が周りの和人を言うときに「シサム」とか「シャモ」という言葉を使った。「シャモ」というのは良

					い意味で使わず、それに対して「シサム」は良い意味で使っていたような気がする。
社会 3	ウェンクル	貧乏人	△	[2]	「ウェンクル」というのは人間的に貧しいことのように思う。「ウェンクル」は馬鹿のこと。「ウェンクル」はなんとなく聞き覚えがある。
社会 4	ウェンペ	悪いこと、 貧乏人(悪口)	△	[1]	はっきりとした聞き覚えはないけど「貧乏人」のことだと思う。
				[2]	「ウェンペ」というと貧乏人のことかな？
社会 5	ウェンペサニ	貧乏人の 子(悪口)	×	[2]	
社会 6	イッカ／イッカ クル	盗む／泥 棒	×	[1]	
社会 7	ホチャッチャリ	節操なし	×	[2]	
言語/伝達 1	イタク／アコロ イタク	言葉／ア イヌ語	×	[1]	
言語/伝達 2	スンケ	嘘	×	[1]	
衣 1	アミブ	着物	×	[1]	
衣 2	チカラカラペ	刺繍入り の 裕 の 着 物	△	[1]	民族衣装の種類のひとつ。子どものころに聞き覚えた言葉ではなく、協会(札幌アイヌ協会)に入って縫物をはじめてから知った言葉。
衣 3	テクンペ	手甲	△	[1]	手のところにつけるやつ(手甲)。子どものころは見えていない。協会(札幌アイヌ協会)に入ってから2枚くらい縫って覚えた。
衣 4	チェブケレ	鮭皮製の 履き物	×	[3]	博物館で見たことあるが、鶴川で見たことはない。
衣 5	ヌイト	縫い糸	×	[1]	
衣 6	タマサイ	首飾り	○	[1]	首飾りのこと。祖母も持っていた。
衣 7	ニンカリ	耳飾り	×	[1]	わからない。(調査者がニンカリの写真を

					提示) 祖母も持っていなかったように思う。
衣 8	レクトウンペ	首飾り布	×	[1]	
食 1	アエブ	食べ物	×	[1]	
食 2	イペ	食事する、 食べ物	○	[1]	食べるということ。朝食のときに祖母が「おまえ、食え」というのを「イペ」と言っていた気がする。もう少し「イペになにな」と言葉が続いていた気がするが、それは思い出せない。
食 3	サヨ	おかゆ	○	[1]	おかゆのこと。小さいころから知っている。私は嫌いだった。「サユ」とも呼んだように思う。ごはんが余ったときなどに祖母が作っていたような気がする。
食 4	オハウ	おつゆ	○	[1]	祖母は「オハウ」を作るのが上手だった。いつもジャガイモをたくさん入れて作っていた。浜の行商から魚を手に入れると、それも使ってオハウを作っていた。
食 5	カム	肉	×	[1]	
食 6	スム	油	×	[1]	
食 7	チェブ	魚	×	[1]	「チェブ」とは言わないけど、サケなどの魚の頭を入れてよく出汁のでた祖母のオハウは美味しかったのを覚えている。
食 8	スサム	シシャモ	×	[1]	子どものころからよく食べていた魚だけど「シシャモ」と呼んでいた。
食 9	アマム／シアマム	穀物／米	×	[1]	
食 10	キナ	草、山菜、 ガマ	○	[1]	野菜のこと。
				[3]	野菜のような食べられる葉っぱのこと。「キナ」という言葉は祖母からも聞いた。祖母の「オハウ」に入っていた。春先に取りれるコゴミなどの山菜みたいなものとか、大根の葉っぱを干したものとか。大根の葉っぱは秋に干して冬中、味噌汁に入れて食べた。大根は漬物とかにしていた。大根の葉っぱは「オハウ」の定番の具材だった。
食 11	トペンペ	甘いもの、	×	[1]	

		砂糖			
食 12	トノト	濁り酒	○	[1]	聞いて覚えている。祖母も1年に1回くらい自室で作っていた。私も祖母のトノトを何回か飲んだことがあると思う。
食 13	イヨシキ	酔う	○	[1]	聞き覚えている。兄がお酒好きだったので、このような言葉も祖母が使ったと思う。
食 14	ワッカ	水	○	[1]	水のこと。祖母は「ワッカ持ってこい」のように言っていた。
				[4]	水のこと。祖母が「ワッカ持ってこい」とか「ワッカ汲んでこい」と言っていたのを覚えている。(2024年11月30日に再度聞き取りしたところ、「ワッカ エンコレー」といえば「水をくれ」ということで、こういった言葉は、祖母の言動から自然に聞き覚えたとのこと)。
食 15	ウセイ	湯	×	[1]	
食 16	シッポ	塩	△	[1]	塩のこと。聞き覚えていたのかわからないが、塩だと思った。「オハウ」は塩味だった。
食 17	ケラアン	おいしい	×	[1]	
食 18	エモ	ジャガイモ	○	[1]	祖母はジャガイモのことを「エモ」と言っていたので覚えている。
食 19	エモシト	いも団子	○	[1]	「エモシト」は祖母がよく作っていて、ストーブの上で焼いて食べていた。私はあまり食べなかったけど、祖母の作ったエモシトを他の人は食べていたと思う。
食 20	キミ	トウモロコシ	○	[1]	トウキビ(トウモロコシ)のこと。祖母は「キビ」と言っていた(筆者注:日本語北海道方言の可能性もある)。
住/火 1	チセ	家	○	[1]	家のこと。「チセ」が家のことだというのは誰でも知っている。
				[4]	家のこと。
住/火 2	シンプイ	井戸	×	[1]	

住/火 3	アパ	戸	×	[1]	
住/火 4	イクシペ	柱	×	[1]	
住/火 5	プヤラ／ロルン プヤラ	窓／東窓	×	[1]	
住/火 6	チタラペ	ゴザ、敷物	○	[1]	敷物のこと。小さいときから知っている。日常生活で目にするものではなかった。
				[4]	言葉は聞いて覚えているが、主に「ゴザ」と呼んでいた。白いガマのゴザは家の中でも敷いていることがあった。(2024年11月29日に再度聞き取りしたところ、台所の一隅にカゴとチタラペが下がってあったとのこと)。
住/火 7	ニカブンペ	模様付きのゴザ	×	[3]	ゴザと呼んでいた。祖母はゴザを編んでいた。
住/火 8	ヤットウイ	長く大きなゴザ	×	[1]	
住/火 9	アペオイ	囲炉裏	×	[1]	
住/火 10	アペ	火	○	[1]	火のこと。祖母も言っていたので覚えている。
住/火 11	スプヤ	煙	×	[1]	
住/火 12	チクニ	薪、立ち木	×	[1]	
仕事 1	イテセ／イテセニ	ゴザ編み、ゴザを編む道具	×	[1]	聞いた気がするけど、意味はわからない。(調査者がイテセニの写真を提示)祖母もゴザ編みをしていたので道具一式や編んでいる様子は覚えがある。
仕事 2	モセ	カヤを刈ること	×	[3]	
道具 1	シントコ	行器	○	[1]	「シントコ」は家にあった。蓋が付いた容器で仏壇のそばに置いてあった。
道具 2	オイベピ	皿	×	[1]	
道具 3	イタンキ	木椀	×	[1]	聞いたことがある気はするが、わからない。
道具 4	トゥキ	盃	○	[1]	「トゥキ」は家にもあったのでわかる。家にはあったが使ってはいなかった。
道具 5	オンタロ	樽	×	[1]	
道具 6	ス	鍋	×	[1]	

道具 7	サラニブ	木の皮の 繊維を編 んで作っ たカゴ	○	[1]	「サラニブ」は小さいときから聞いていた。これは昔から家にあって、台所の壁に祖母の「サラニブ」が下がっていて目にしていた。祖母も普段使っていたわけではないが、目に入れて楽しむ心の拠り所だったのかもしれない。
道具 8	パスイ／イクパ スイ	箸、捧酒籠	○	[1]	「トゥキ」の上に乗せて使うもので、トゥキとともに一組、家にあった。
道具 9	カスブ	(汁物用 の) 杓子	×	[1]	
道具 10	ピサック	柄杓	×	[1]	
道具 11	マキリ	小刀	○	[1]	小刀のこと。昔から聞いていた。いまでも言うと思う。(2024年11月30日に再度聞き取りしたところ、工芸として彫刻が施されているような小刀ではなく、日用の台所道具としての刃物のことを「マキリ」と呼んでいたとのこと。
道具 12	カ	編む糸、織 り糸	×	[4]	糸玉は祖母も持っていた。ゴザを編むときに使っていた。祖母が糸縫りしている様子を見た覚えはないが、糸玉が家の中に置いてあるのは目にしていた。
道具 13	シキナ	(敷物用 の) ガマ	×	[1]	ゴザを編む材料は「ガマ」と呼んだ。祖母がゴザを編むためのガマ刈りに連れて行かれたことがある。
道具 14	ピッ	ゴザ編み 用の小石	×	[4]	
道具 15	クワ	杖	×	[1]	
道具 16	キライ	櫛	×	[1]	
道具 17	タラ	荷縄、背負 い紐	×	[4]	(調査者がタラと使用例の写真を提示) このような背負い紐を使った背負い方もあまり見た記憶がない。
知的活動/精 神活動 1	イルシカ	怒る	×	[2]	
知的活動/精 神活動 2	イカラシキ	もったい ない	×	[2]	
知的活動/精	コヘトチ	(言動が)	○	[2]	「コヘトチ」は祖母の言葉で聞き覚えがあ

神活動 3		わけわ からない			る。馬鹿という意味のように思う。
知的活動/精 神活動 4	イム	発作性の 精神錯乱	×	[2]	「イム」というのは聞いたことないけど、 靈感かなにかにかかわりのある言葉だろ うか。
信仰/儀式 1	カムイ	神	○	[3]	「カムイ」は神様のこと。
信仰/儀式 2	パセカムイ	位の 高い 神	×	[3]	「カムイ」は神様だとわかるが、「パセ」 はわからない。
信仰/儀式 3	アペフチカムイ	火の神	○	[3]	「アペ」は火のこと。お参りするときは「ア ペフチカムイ」。子どものころに住んでい た家では、冬場にストーブを置く場所があ った。夏場、ストーブを外すと炉縁があら われる。田植えが終って暇ができると祖母 のもとに部落(集落)の女性たちが集まり、 その炉縁に向かいあって歌ったり踊ったり していた。「アペフチ」のことを尊敬し てるからそこを使っていたと思う。祖母が ストーブの火にお祈りしたり、ものを分け 与えていた記憶はない。
信仰/儀式 4	ワッカウシカム イ	水の神	×	[3]	「ワッカ」は水だけど、この言葉はわから ない。
信仰/儀式 5	カミアシ	悪者、おば け	×	[2]	仏さん？どこかで聞いたような気はする けど覚えてない。わからない。
信仰/儀式 6	トゥス	神おろし をする	×	[4]	「トゥス」は聞き覚えがないが、「フッサフ ッサ」という魔払いを受けた経験はある。
信仰/儀式 7	オンカミ	礼拝する	○	[3]	「オンカミ」は祈る。これはわかる。
信仰/儀式 8	カムイノミ	神に祈る、 その儀式	○	[1]	「カムイノミ」はお祈りすること。
				[3]	小さいときから聞いている。神様にお祈り をすとかそういうことだと思ふ。カムイ ノミは家では見ていない。同居していた祖 母が亡くなったときに親戚のおじさんが 家に来て、盛大にはないが囲炉裏のとこ ろでカムイノミをしていた。
信仰/儀式 9	イナウ	木幣	○	[1]	儀式で使うもの。子どもころ家の中には

					なかったけれど、神様が入り出すという東側の窓の外から2、3メートルくらい離れたところにはあった。
信仰/儀式 10	イチャラパ	先祖を供養する、その儀式	○	[1]	子どものころから聞いている言葉。「イチャラパ」は、女の人たちがお供え物を撒いて、これを食べてちょうだいと与える儀式。
				[3]	家の中ではなく、外で神様にお祈りすること。この言葉は小さいときから耳にしていた。子どものころに住んでいた家の東側の窓から2、3メートルほど離れたところに、小さいイナウがあったのを覚えている。
信仰/儀式 11	イヨマレ	酒を注ぐ	×	[4]	
遊び/芸能 1	ヤイサマ／ヤイサマネナ	ヤイサマ、即興歌	△	[4]	祖母が部落（集落）の友人たちと集まって盛り上がっているときに歌っているのを何度かきいたことがある。
遊び/芸能 2	シノツチャ	歌	×	[4]	
遊び/芸能 3	ユカラ／カムイユカラ	ユーカーラ（英雄叙事詩）	△	[4]	「ユカラ」という言葉は聞き覚えがある。（2024年11月30日に再度聞き取りしたところ、部落（集落）の人たちが祖母のところに集まってアイヌ語だけで楽しんでいるときに、炉縁で拍子をとって歌っていたのを耳にした記憶もある。ただそれだけでなく、「ユカラ」や「ヤイサマ」のような言葉は札幌に出てから覚えた言葉とのこと）。
遊び/芸能 4	ウウエペケレ	民話、昔話	△	[4]	鶴川を離れて協会（札幌アイヌ協会）の活動に関わるようになってから知った言葉。
遊び/芸能 5	ハウエピリカ	声が良い	×	[4]	
遊び/芸能 6	ウパシクマ	事実や教えを語る、昔話	×	[4]	
遊び/芸能 7	リムセ	踊る	△	[4]	今はアイヌ民族の活動で耳にするが、子どものころは聞き覚えがない。
動物 1	チカブ	鳥	×	[1]	

動物 2	チャペ	ネコ	○	[1]	猫のこと。母は野良猫を養っていて家に2匹ぐらいいた。親が「チャペ」と言っていたわけではないが、祖母か周りの誰かが言っているのを聞いているから覚えている。 <sup>7</sup>
動物 3	カムイ	クマ	○	[1]	クマのこと。「カムイが出た」のように言っているのを聞いていた。
動物 4	キムンカムイ	クマ	△	[1]	「キムンカムイ」というのは、汐見ではあまり聞かなかった。二風谷に逗留していた若者に占ってもらったさい「あんたのうしろにキムンカムイがいるよ」と言われたことがある。クマのことだとはわかっていた。
動物 5	セタ	イヌ	○	[1]	犬のこと。汐見でも「セタ」と聞いた。うちにも祖母と暮しているときに犬がいたので聞き覚えている。
動物 6	チロンヌブ	キツネ	×	[1]	
動物 7	イセボ	ウサギ	×	[1]	ウサギは食べたことない。
動物 8	エルム	ネズミ	×	[1]	
動物 9	フンベ	クジラ	×	[1]	聞いたことはあるが、わからない。
動物 10	ペコ/ベコ	ウシ	○	[1]	牛のこと。「ペコ」ではなく「ベコ」と言っていた（筆者注：日本語北海道方言の可能性もある）。
動物 11	ユク	シカ	×	[1]	
動物 12	ウンマ	ウマ	△	[1]	馬のことだろうか。うちには大きな馬小屋があって、とてもよく働いてくれた。「ウマ」ということが多かった。
動物 13	トッコニ	ヘビ	×	[1]	
動物 14	カムイチェブ	サケ(アキアジ)	×	[3]	聞いたことがある気はするが、わからない。
動物 15	タイキ	ノミ	×	[1]	
動物 16	ウルキ	シラミ	×	[1]	
地文 1	ヌプリ	山	×	[1]	
天文/自然現	ノチウ	星	×	[1]	

<sup>7</sup> アイヌ語の「チャペ」は、地理的分布やアクセント位置に関する考察から日本語からの借用語であることが指摘されている（落合 2022）。T氏によると、当時の汐見において日本語北海道方言を話す周りの和人がネコのことを「チャペ」と呼んでいた記憶はないとのことなので、本稿では暫定的に「チャペ」をアイヌ語の語彙として扱う。なお、この補足は査読者のコメントを受けての追記である。指摘に感謝する。

象 1					
天文/自然現象 2	セセク／シリセセク	暑い	×	[1]	
天文/自然現象 3	メライケ／メアン	寒い	×	[1]	
天文/自然現象 4	シリピリカ	天気が良い	×	[1]	
天文/自然現象 5	アプト	雨	×	[1]	
天文/自然現象 6	ウパシ	雪	×	[1]	
天文/自然現象 7	レラ	風	×	[1]	
天文/自然現象 8	ルヤンペ	嵐	×	[1]	
価値/性質 1	ピリカ	良い、美しい	△	[1]	きれいだ、良い、美しいというような意味。 (2024年11月30日に再度聞き取りしたところ、子どものころからよく耳にした言葉だけど、意味に注意を払って聞いていたわけではないので、汐見にいるときはよくわかっていなかったと思うとのこと)。
価値/性質 2	イチャッケレ	汚い、汚れている	○	[2]	「イチャッケレ」は聞いたことある。触るなどか、だめだっというようにときに (T氏が手で何かを払うような仕草をして) 「イチャッケレ」と言っていた気がする。
価値/性質 3	シレトク (コロ)	器量良し	×	[2]	
価値/性質 4	イボカシ	醜い(みっとくない)	○	[1]	みっとくなし (不美人) のこと。何回か言われた記憶がある。例えば相手が美人であろうとも、腹立っているときに言う。同級生の男の子に言われたかもしれない。 (2024年11月30日に再度聞き取りしたところ、こういった悪口は、T氏の同世代でも使うことがあり、相手に腹が立ったり生意気だと思ったら「なにこのイボカシ!」のように言っていたとのこと)。
				[2]	「イボカシ」はみっとくない (醜い) とい

					うこと。祖母に言われたことある。本当に怒って罵るというのではなく、どこか親しみを込めて「イポカシ！」(みったくなし)と言っていた。
				[4]	顔が悪いこともいうけど、綺麗な人でも性格や精神的が良くない相手には「あー、イポカシ」と言った。
価値/性質 5	イヤイキプテ	あぶない	×	[4]	
価値/性質 6	ラメトク (コロ)	勇猛だ	×	[2]	
価値/性質 7	パウエトク (コロ)	雄弁だ	×	[2]	
価値/性質 8	ハイタ/ハイタクル	足りない、頭が悪い	○	[1]	馬鹿ということ。祖母がよく「このハイタ！」というように言っていた。「ハイタクル」という言い方も知っている。
				[2]	「ハイタ」は馬鹿という意味。祖母に「このハイタ！」とたまに言われた。「ハイタクル」もよく聞いた。「エパタイ」というのも「ハイタクル」(馬鹿)ということ。
価値/性質 9	ルハイタ	あまり頭がよくない	×	[2]	
価値/性質 10	カムタチサク	頭が悪い(悪口)	×	[2]	
価値/性質 11	ウエンメノコ	くされ女(悪口)	△	[2]	「メノコ」はわかるけど、「ウエン」はなんだろう。「どうもならん女」という意味だろうか? 「ウエン」という言葉はあんまり良くない。
価値/性質 12	ムニンペサニ	腐った者の子(悪口)	×	[2]	
価値/性質 13	ウコポイエ	混ぜる、混血	×	[1]	
価値/性質 14	エトゥカプケ	鼻つぶれ(悪口)	×	[2]	
価値/性質 15	エトンラチチ	鼻たらし	×	[2]	
価値/性質 16	パロルイ	おしゃべ	×	[2]	「パロルイ」はわからない。「パロ」は口、

		りだ			おしゃべりというのはわかる。
価値/性質 17	ヘプトウトウ	ふくれつ らをして いる	○	[2]	文句をいうのではなく、怒っているという か、こう (T氏が頬を膨らませて顔をしか める表情をして) ふくれ面をしていること を「ヘプトウトウ」という。「ヘプトウト ウしてる」と言っていた。
間投詞 1	アチカラタ	驚いた時 に出る声	×	[2]	
間投詞 2	オヨヨー	驚いた時 に出る声	×	[2]	
間投詞 3	イヨハイ	驚いた時 に出る声	○	[2]	聞いたことある。「イヨハイ」というと「え っ!」とか「大変だ!」とか「そんな!」 とか驚いたものだと思う。祖母だけでな く、日本語の発話の中でも「いや、本当に 困ったよね」というときに最後に「イヨハ イ」と言っていた気がする。いやあ、どう しようとか、そんなかんじだと思う。
間投詞 4	オハイネ	納得した り合点が いったと きに出る 声	×	[2]	
間投詞 5	ハイー	痛いとき、 苦しいと きに出る 声	○	[2]	聞いたことある気がする。「ハイー」は、 病氣して寝ていて「ハイー」、そういうと きに使う気がする。言葉の続きで言うので はなく、体調が悪くてひとりでじっと座っ ているときなど、身体が耐えられないとい うときに「ハイー」と言う気がする。
間投詞 6	ホクレ	さあ早く	○	[4]	「急げ」ということ。朝、祖母と朝食をと って学校に行くとき「ホクレホクレ!」と 急かされて送り出されたのを覚えている。
間投詞 7	イヤイライケレ	ありがと う	○	[2]	たくさんではないけど、小さいときも聞いた ような気がする。民族(の集まり)の中 では今でも使っている。
間投詞 8	ヒオイオイ	ありがと う	×	[2]	

間投詞 9	フンナ／ヒンナ	(女性が いただき ものをし たとき)あ りがとう	×	[2]	聞いたことない。(この言葉に伴う女性の感謝の仕草について調査者が実演して問うと)そういう仕草をした人もいないかもしれないけど見た記憶はない。
間投詞 10	エパタイ	馬鹿、愚か 者(罵り)	○	[2]	「エパタイ」は「ハイタクル」(馬鹿)のこと。聞いたことある。
間投詞 11	パラセコロ	ざまあみ ろ	△	[2]	「パラセコロ」は聞いたことある。意味ははっきりと思い出せないけど、たしかに聞いた。

### 3. T 氏のアイヌ語についての考察

調査した 179 項目のうち、T 氏の理解として「○」の語彙は 52 項目、「△」の語彙は 18 項目、「×」の語彙は 109 項目であった。語彙分類に対する理解の分布を以下の表 2 にまとめる。

表 2 調査項目に対する理解の分布 (丸括弧内は該当項目数)

	○ (52)	△ (18)	× (109)
人体 (23)	3	3	17
人間 (7)	5	1	1
人間関係 (6)	3	1	2
社会 (7)	2	2	3
言語／伝達 (2)	0	0	2
衣 (8)	1	2	5
食 (20)	10	1	9
住／火 (12)	3	0	9
仕事 (2)	0	0	2
道具 (17)	5	0	12
知的活動／精神活動 (4)	1	0	3
信仰／儀式 (11)	6	0	5
遊び／芸能 (7)	0	3	4
動物 (16)	4	2	10
地文 (1)	0	0	1
天文／自然現象 (8)	0	0	8
価値／性質 (17)	4	2	11
間投詞 (11)	5	1	5

本調査の調査項目は、基礎語彙における各分類に対して網羅的な語彙の選定・提示ではないため、分類間における理解を単純に比較することはできない。本調査での暫定的な18分類の語彙のうち、「言語／伝達」「仕事」「地文」はごく限られた語彙のみの提示となり、その中にT氏が理解する語彙はなかった。また「天文／自然現象」の語彙についてもT氏に聞き覚えがあるものはなかった。しかし、それ以外の分類に属する語彙には聞き覚えがある言葉も一定数みられ、どのような状況で発された言葉なのかなどを含め興味深い回答を得ることができた。T氏のコメントをもとに、「聞き覚え」のある語彙を整理すると次のようにまとめられる。

### 1) 対人評価に関わる語彙

イポカシ（醜い、みったくない）、ハイタ／ハイタクル（足りない、頭が悪い人）、ヘプトウトウ（ふくれつらをしている）、エパタイ（馬鹿、愚か者）、コヘトチ（言動がわけわからない）

これらには、T氏が祖母のシュチミナ氏から直接言われた言葉も多く、日本語と入り混じって「このハイタ！」や「ヘプトウトウしてる」のように冗談や情愛ある文脈で発せられていたとのことである。また、「イポカシ」などの悪口は、アイヌ語を母語とする世代に限らずT氏と同世代の間でも、相手に腹が立ったときや生意気だと思ったときに「なにこのイポカシ！」のように言っていたとのことである。

### 2) 行為要求に関わる語彙

イペ（食事する）、ワッカ（水）、ホクレ（さあ早く）、イチャツケレ（汚い、汚れている）

これらは、祖母のシュチミナ氏がT氏に向けて日常の中で使っていた言葉とのことである。たとえば、登校前に家で朝食をとっていると祖母から「イペ！」（食べ！）と促されたり、学校に遅れないよう「ホクレ！ホクレ！」（さあ早く早く）と促されたとのことである。また、「ワッカ エンコレー」（水をくれ）、「ワッカ（水）持ってこい」のように、祖母はT氏にアイヌ語でも自然と行為要求をしていたとのことである。

### 3) 文化的経験に関わる語彙

<食文化・食習慣>

オハウ（おつゆ）、サヨ（おかゆ）、キナ（草、山菜）、エモ（ジャガイモ）、エモシト（いも団子）、キミ（トウモロコシ）、トノト（濁り酒）

これらの言葉は、祖母のシュチミナ氏がT氏と暮している中で実際に料理をしたり濁り酒を作ったりしていたことから自然と聞き覚える機会があったとのことである。

<精神文化・儀礼>

カムイ（神）、カムイノミ（神に祈る儀式）、イチャラパ（先祖供養の儀式）、アペ（火）、アペフチカムイ（火の神）、イナウ（木幣）、オンカミ（礼拝する）

T氏の記憶では、父母は家庭内でカムイノミなどの伝統儀礼を一切行わなかったとのことであるが、T氏の親戚にはカムイノミができる人もおり、また、地域としては伝統儀礼や信仰が時代にあわせて実践・継承されていたことから、アイヌ民族の儀礼に関する語彙は、汐見で生まれ育てば家庭のことでなくても自然と聞き覚える言葉とのことである。

T氏が暮した家にも東側に窓（神窓）があり、窓の外には小さなイナウが立ててあったとのこと、祖母のシュチミナ氏や親戚、地域の人との付き合いの中でT氏がアイヌ民族の精神文化に接する機会も（積極的に参加していなくても）あったと考えられる。

#### 4) 民族コミュニティに関わる語彙

コタン（集落）、シサム／シャモ（和人）、ウタラ／ウタリ（親戚）、ニシパ（立派な男性）、ヘカチ（男の子）、マッカチ（女の子）、エカシ（おじいさん）、フチ（おばあさん）、メノコ（女性）、アチャポ（おじさん）

これらの言葉は、同じ地域に暮すアイヌ民族と和人のコミュニティの対比の中で用いられたようだ。たとえば、「コタン」というのは和人が形成した集落や市街地のことではなくアイヌ民族が居住してきた集落のことをさし、「シサム／シャモ」はアイヌ民族の立場から和人のことをさす。また「フチ」（おばあさん）や「エカシ」（おじいさん）、「ウタラ／ウタリ」（親戚）などの呼称や人間関係は、和人を含めるものではなくアイヌ民族同士の関係において用いられていたとのことである。T氏を取り巻く民族コミュニティ意識の中で日本語の中にも入り混じって用いられていたと考えられる。

#### 5) 家財に関わる語彙

タマサイ（首飾り）、チタラペ（ゴザ）、シントコ（蓋つきの容器）、トゥキ（盃）、パスイ（捧酒籠）、サラニブ（木の皮の繊維で編んだカゴ）

これらは、主に祖母のシュチミナ氏が財産として所有していたもので、家の中に置いてあるのをT氏も目にしている。日用品ではなく民族文化にかかわりが深い品々で、「チタラペ」を「ゴザ」と日本語で呼ぶ以外は、「タマサイ」や「シントコ」などを日本語で呼ぶこともなく（これらが家庭内の日常で話題に上ることもあまりなかったとのことではあるが）、それらをさす言葉として自然とアイヌ語の名称だけを聞き覚えたとのことである。

## 6) 動物に関わる語彙

チャペ (ネコ)、カムイ (クマ)、セタ (イヌ)、ペコ (ウシ)

これらの言葉は、「カムイ (クマ) が出た」のように日本語の中で入り混じって用いられ、T 氏も聞き覚えがあるとのことである。特にイヌとネコは、祖母と暮しているときに家で飼っていたため、祖母がイヌやネコについて「セタ」や「チャペ」と言っているのを聞いて自然と覚えたとのことである。

## 7) 間投詞

イヨハイ (驚いた時に出る声)、ハイー (痛いとき、苦しいときに出る声)

これらの言葉は、祖母のシュチミナ氏をはじめアイヌ語を母語とする人々の間で聞かれたとのことで、どのような感情を反映した表現かも含め T 氏は理解している。

## 4. 結論

本稿ではアイヌ語を母語とする家族と同居して育った女性 T 氏 (1947 年生まれ、むかわ町 汐見出身) へのアイヌ語の語彙理解に関する質的調査を実施した。調査語彙 179 項目のうち、T 氏が汐見での生活の中で聞き覚え、理解していると考えられる語彙は 52 項目あり、暫定的なグルーピングではあるが、対人評価、行為要求、文化的経験、民族コミュニティ、家財、動物、間投詞にかかわる語彙に該当するものであった。その多くは、T 氏が中学校 2 年生の時分まで同居していた祖母のシュチミナ氏 (アイヌ語を母語とする日本語とのバイリンガル) が使用した言葉の記憶であるという。

この他にも T 氏がアイヌ語の母語話者と生活をともにする中で聞き覚えた言葉は数多く存在すると考えられる。日本語を母語・第一言語とする T 氏が生まれ育った環境の中で自然に習得される語彙は、まさにアイヌ語の世代間継承の一部といえる。このことはまた、アイヌ語と日本語のバイリンガルがアイヌ民族コミュニティにおける中高年層に健在であった 1940 年代から 1950 年代の汐見において、日本語を母語とする世代の言語環境におけるアイヌ語の使用実態、あり方を考えていく上での重要な手掛かりとなる。

本稿は、1 名の調査協力者への質的調査に基づく調査結果の公開と若干の考察を行ったが、今回の調査協力者と同様の条件の人々はまだ多く健在である。語彙に対する理解における個人的な特徴、世代的な特徴、性差・位相差に基づく特徴など、戦後世代のアイヌ語の継承状況について、引き続き調査を継続していきたい。

## 謝辞

\* 本研究への調査協力をご快諾くださり、長時間かつ膨大な数の語彙調査に丁寧にご回答、ご教示くださった調査協力者の T 氏に心より感謝申し上げます。また、本稿の改訂にあたり貴重なご指摘をくださった 2 名の匿名査読者に感謝申し上げます。

### 参考文献

- 『エカシとフチ』編集委員会（編）（1983）『エカシとフチ：資料編 文献上のエカシとフチ』札幌：札幌テレビ放送。
- 落合いずみ（2022）「アイヌ語の『猫』：特に日本語東北諸方言からのアイヌ語北海道方言への借用について」『北海道民族学』（18）. 13-22.
- 小野米一・奥田統己（1999）『北海道のことば』札幌：北海道新聞社。
- 岸本宜久（2023）「アイヌ語鶴川方言テキスト（1）：火の玉を見て気を失った話」『北方言語研究』（14）. 251-270.
- 北原次郎太（2011）「アイヌ語継承の現状」木部暢子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超・北原次郎太・山田真寛（編）『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書』91-96. 立川：国立国語研究所。
- 汐見二区自治会（1987）『汐見二区沿革史 大地は語り継ぐ』鶴川町：鶴川町汐見二区自治会。
- 田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館。
- 田村すず子（2002）『アイヌ語音声の研究（平成 13 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書）』東京：早稲田大学語学教育研究所。
- 中川裕・大谷洋一（1995）「フォーラム：アイヌ語研究の現状と問題点」『言語研究』（108）. 115-135.
- 服部四郎（編）（1964）『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店。
- 北海道教育庁社会教育部文化課（編）（1989）『昭和 63 年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民族調査 VIII）』札幌：北海道教育委員会。
- 早稲田大学語学教育研究所（編）（1983）『アイヌ語基礎語彙』東京：早稲田大学語学教育研究所。

### 執筆者紹介

氏名：岸本宜久（きしもと・よしひさ）

所属：札幌学院大学経済経営学部

Email：kishi@sgu.ac.jp